犯罪者の世界征服物語

憂鬱なサラリーマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人柱力。

体の中に尾獣を封印されている。

それだけで里の迫害を受けた主人公「扇子　ガギル」。

彼の復讐劇が、今、始まる。

目次

犯罪者降臨 ―― 1
ガギル隊集結！ ―― 6
ラッパー対修羅 ―― 11
雲隠れの一戦 ―― 16
戦・完 ―― 22
ババアは何処へ？ ―― 27
ババアと化け狐とぺったんこと阿呆 ―― 30
伝説の、、、何だって？ ―― 35

犯罪者降臨

俺はこの世界が嫌いだった。
何もしていないのに俺を傷つけるこの世界が。
守ってくれる人なんていないこの世界が。
皆は俺をいじめた。
暴力を振るった。
顔を殴り、鳩尾に膝蹴りを入れ、関節を決める。
石を投げられ、顔に当たり倒れて血を流しても無視、それどころか笑われた。追撃をするかのように倒れる俺の顔を蹴り上げた奴もいた。
3代目のじいさんは味方だ！と言って護衛をつけてくれるようになっても、里の人から文句を言われ、何か言われた直後、急に態度が変わった。
1部の護衛からも迫害を受けるようになった。
寝てる間に骨を折られた。
首を絞められあと一歩のところまで行った。
唯一の救いは怪我の後遺症が少なかったところだった

痛い、痛いよ
何で誰も助けてくれないの？
僕が何したの？
ねぇ…もう…死にたいよ
何で僕を産んだの？攻撃するためなの？
やだよ。
ぼく、やだよ。
普通に生きたかった…

だから決めた、世界を旅し、力をつけ、この世界の不必要な物、つまり、この世界の人類を皆殺しにする。ということを。
そのためなら何だってやってやる。

特にこの里には俺の痛みを、つらさを、悲しみを、怒りを、恨みを、負の感情のすべてをぶつけ、必ず、滅亡させてやる。

絶対に許さない

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「5代目!あいつが!あの犯罪者が!〝修羅〟が牢獄を破壊し逃亡!すでに里の外に出ました!」

「なに?!」

伝説の3忍とよばれた5代目火影こと綱出が最悪の悲報を聞き頭を抱える

「ガギル…あいつを外の世界に放つのは非常にまずい。今すぐ、動ける忍をここに呼べ!それも腕が立つ物を!必ず捕獲する!」

(もう一度つけ直す必要があるな…チャクラも溜め直さねーと。ブラ

ンクでかいぞ）
拳を握りながら、森を颯爽する。
後方から雷が襲いかかる。
「なんだ？」
振り返り雷を吸収する。
この技には覚えがあった。
「カカシさん、お久しぶりです。ガイさんにアスマさんも。」
特に姿は見えないがチャクラを感知し、追っ手達に姿を表すように促し、それに呼応するように3人が姿を現す。
「君を連行させてもらうよ。ガギル」
「そうだ。青春の道を外れたおまえをこの青き野獣ことマイト・ガイと我々の友情パワーでおまえを捕まえさせてもらう！」
「おとなしくしろ。というのは聞いてくれねぇか。」
「すいません。逃げさせてもらいます」
とびっきりの笑顔で答え、高速で印を結び先制攻撃を仕掛ける。
「火遁　鬼火の術」
口から鬼火をいくつか繰り出し、それらを広げ3人を囲い込む
次の技をよけさせないために、逃がさないようにするために
「火遁　豪火球の術」
囲い込んだところに火球を打ち込む。
だが彼らは動けない
鬼火が囲んでいるから
「じゃあね、って甘くないよね」
火球が直撃したことを確認し、立ち去ろうとしたが水龍が襲いかかってきたことにより動きを止める。
煙の中からチッチッチッチッチッチという音が聞こえ始める
「これは…まずい」
右手にチャクラを溜め迎撃態勢に入る
「雷切!!!」
カカシが右手にまとった雷と共に高速で突いてくる
「螺旋丸！」

右手に溜めた技を雷切に直接当て相殺する。
次の攻撃態勢に入ろうとしたとき八門のうち1つ開門をあけたガイが詰め蹴りを入れようとするも、しっかりガードをする。
「見えていましたよ」
「それも計算のうちだ」
ガードされたはずのガイがにやっと笑い、辺りを灰が包み込む
「これは」
一瞬気をとられた隙にガイがその場を離れる
「火遁　灰積焼」
火打ち石を鳴らしたような音がカチッと鳴り、灰が爆発する。
アスマの技だ。
「危ないですよ、勘弁してください」
躱したガギルは重力に反するように木の枝に足の裏をくっつけ逆さまになっている
「そろそろ行かしてもらいます」
「水遁　濁流激」
激流が3人に襲いかかる
勿論難なく躱せる3人だったが、ガギルが見逃すわけ無く上に飛んだ3人に火遁を放つ
「火遁　鳳仙花の術」
不意に来た技に思わず体が反応し、躱そうとするも直撃し濁流に落ちる
「雷遁　稲妻走りの術」
雷が一瞬で駆け巡る
戦闘不能とまでは行かないが、多少動きを止めることに成功する
「じゃ、退散させてもらいます。火影殿にまた来るとお伝えください」
水に浮く3人に告げ、退散しようとする。
「ま、まて。行かせない。おまえの先輩として」
しびれて動けないはずのカカシが立ち上がり、手を伸ばしてくる。
「そんな遠い過去の話を今更したって仕方の無いことです。ナルト達によろしくお願いします。」

痺れる3人に特に何もせず、そう言葉を言い残し、その場を退散する。

これから「扇子　ガギル」の物語が始まる。

ガギル隊集結！

「大変申し訳ありません。ガギルが逃げてしまいました」
　体を動けなくさせられただけだったが、ガギルに敗北し、逃亡を許してしまった3人が火影の前で膝をつく。
「仕方あるまい。あいつが相手だったんだ、おまえ達じゃなかったら足止めに成功することするしなかっただろう。それより無事でよかった。」
「あいつはまた来ると言っていました。次は必ず捕獲して見せます」
「いつ来るか分からない、すぐにでも対策がいるな」
　綱出は決意を固める
　以前あった事件を起こさせないために
　木の葉が生んだ化け物を止めるために
　ガギルの手をこれ以上血に染めないために
「至急会議の準備だ！あのじじい共を呼べ！」

「逃げ切れたかな？」
　ガギルは木の葉の里を抜け、雲隠れに続く、霜の里にいた。
「あいつらとも連絡しとかないと」
　印を結び、口寄せをする。
「頼むよ？八咫、あいつらにこれ届けて」

分身させて、普通の鳥に変化させた鳥に手紙を届けさせる。
「すぐに動くわけにはいかない。次は必ず成功させるために」
自分の胸の傷を見て自分の復讐心が風化していないことを確認し、合流地点である雲隠れの里に向かう
「あいつら俺が2年捕まっている間に俺のこと忘れてないかな。忘れてないといいけど…」

ーーー雲隠れーーー
「雷影様。火の国木の葉の里から伝達。〝修羅〟扇子　ガギルが逃

走。林の国方面に逃亡したとのこと」
「なんだと!ガギルが逃亡だと!木の葉は何をやっているんだ!!」
あまりにも突然すぎる悲報に失態を犯した木の葉に怒りで机を破壊する。
「雲隠れならこんなことは起きん!!国境部隊に連絡!あいつらがここに侵入することが万が一にも起きてはならん!」

ーー霧隠れーー
「水影様。火の国から一報。〝修羅〟こと扇子ガギルが牢より脱獄。すでに里を出たとのことです」
「何ですって!それが本当なら非常にまずいですわ!彼らの侵入を許すわけにはいかない、至急、国境警備隊の数を強化して!」
迅速に指示を出す。
彼が国に入るほどまずいことはないのだから。
「そして、火影様に連絡して!直ちにね!」

ーー砂隠れーー
「風影様!火の国から連絡です!〝修羅〟扇子ガギルが逃走!現在行方は不明!最終確認地点は林の国とのこと!」
「なに?!ガギルが!林の国ということはここら辺にはこない。至急火影殿に連絡しろ!」
自分を助けてくれた友がいる木の葉の里にまた惨劇が襲いかかるのかと思うとぞっとしていた。
「あいつを野放しにしてはいけない」

ーー雲隠れ外れーー
「ガギル、おせぇ」
合流地点に先についていた仲間が入ってきたと同時に文句を言う
「よく出てこれましたね。いくらガギルさんとはいえ、さすがに一人じゃ出てこれないかと思いました」
「一応お前らのリーダーだぞ？なめんなよ？」
「なめてなどいない。だからここに集まった」
じーさん…自分で言っといてなんだけど照れる
「そんなことより、俺らを呼び出した用事は何だ？」
「あぁ、そうだったな。では、本題に入る」
一人の仲間の言葉で話し始める
「俺の脱獄で各里の警備はいま高まっている。特に俺たちは今要注意人物だ。そのため、ほとぼりが冷めるまで表舞台から姿を消す。」
笑顔で話し始めたガギルだが、途中から真顔になってゆく。
木の葉への怒りが強まっているのか空気がズンッとしたものに変わる。
「そして一度失敗した木の葉潰しを次こそ成すために、力をもう一度つける期間とする。我々『戒厳』は世界を無に帰す。それを伝えるために呼んだ」
張り詰めていた空気が一気に解放される。
皆、名のある忍であるが、ガギルがたまに出すこういう雰囲気になれなかった。
「一応意見を聞こうと思うけど…どうする？」
また頼りないガギルだといつもの空気になる
「俺達は別にかまわねぇよな。」
「はい」

「少し退屈になるがな」
二人の許可が下りる
「わしもかまわない。」
じーさんの許可も下りる
「俺もだ」
全身姿を隠す変人の許可も下りる
そのほかの人の許可も確保する

「それでは。散!!!!」
一斉に皆が飛び、残るのはガギルだけとなった。

「さぁて、とりあえずこのままあいつのところに行くか。あ、耳栓もってこ」

ガギルが計画のために動き出した、今、このとき、これから起こる大事件を誰も想像できていなかった。

ラッパー対修羅

ー雲隠れ雲雷橋ー
「ここにいるって聞いたけど、どうなんだ？」
雲隠れの忍を幻術にかけて引き出した情報を元に来た場所で有無を確認するためにチャクラを練り上げる
そこに尾獣玉が飛んでくる
当然躱すけど
「何のつもりだよ。ビー」
「八尾がサビのキラービー。俺様が雷影とコンビー。おまえ、なんでここにいる？」
尾獣化を解いたキラービーがラップを刻みながら建物の中から出てくる
「体の動きが悪いんでな、その直しにきた」
「何言ってんだよ、おまえはここで止めさせてもらう。それがおまえの友である俺の役目！人柱力の俺の使命！」
「相変わらず下手なラップだよ。殺す気できてね？ビーさん？」

先に動いたのはビーだった。
7本の刀を体の節々に挟み、回転しながら突撃してくる
彼の刀捌きは世界中を探したって受けることができない特別な物で、速度、力強さ共に一流品である
普通これを食らったら無傷ではいられない
普通は…ね？
だが、ガギルは当然すべてを受け流す
刀1本で
「おいおいビー手抜いてねぇだろうな」
一瞬の隙を突きビーの肩から横っ腹に切り抜ける
「演者だな」

7本の刀がガギルの体を貫いた
ガギルの一撃を防いだようだ
メカニズムは尾獣化だろうと読む
「毎回だまされるおまえ定石♪、それを可能とする俺の演技上出来♪」
ガギルの折った刀を放り投げながらラップを刻んでいる
刺されたガギルは前のめりに倒れる
と思われたが、突如姿を消しビーの顔に蹴りを入れる
寸前でガードをしたものの、その蹴りの衝撃に後方に吹っ飛ぶ

追撃をしようと瞬身の術で近づき、体に刺された刀を抜き斬りかかるが、八尾の尾で止められる。しかし、深々とビーの脇腹に刀が刺さっている。
刀を背後で放し見えないように左手に持ち替えたようだった
うろたえた瞬間に残りの6本もビーに投げつける
すべて尾で弾かたがビーへの牽制としては有効打となった
その証拠に弾いた後、体勢を崩し、地面に伏している
「おいおい、ビー。おまえが体怠ってのか?」
クナイを投げつけるも軽く躱される
なまっているとは思えない動き、当然煽りである
「前までの俺は強気♪これからの俺は本気♪よっと!」
そのかけ声と共に、紅い人型の尾獣化をする。尾の数は4本。
「様子見か…つまらんことをするよ」
ポーチからクナイを取り出し、対面する
尾獣化した相手に明らかに頼りなさ過ぎる武器。
引き出しが多すぎるガギルが相手だから尾獣モードでもうかつに動けない
「その姿だから突っ込んでくると思ったのに、ビーは冷静なんだね」
動かないビーにガギルが先制攻撃を仕掛けようと印を高速で結ぶ
「火遁　豪火球の術」
よける気配のないビー
それはもう不自然なくらいに

直撃し、煙が巻き起こる
「おいおい、さすがにそれは不自然だよ」
左手にクナイを持ったまま、右手でチャクラを練り始める
電光石火のごとくガギルの首に雷⊠熱刀が入り、吹っ飛んだ
右手の螺旋丸は意味なく消えてしまった
壁にめり込んでいるガギルは胸と首の皮が吹っ飛び、骨が折れている
「い、い…ってええ…え。、、な。。。。 ぁぁぁ」
体中血だらけのガギルは紅いチャクラを湧きだちはじめ体の治療を開始する。
「(おい。ガギル黙って見てれば、なになめてんだ。わしのチャクラを使え！)」
「う、っせっぇっっぇ、ぞ…、、ク、、、…らまぁっ、ぁぁ。。」
ボロボロの体を引きずりあげ、普段寡黙なくせに急に話しかけてきた友(九羅痲)を再度黙らせる
傷口を塞ぎ、めり込んだ壁から地面に降りる
雷⊠熱刀の傷は大方治っている
「相変わらずだよアホ狐」
「(うるせぇぞ！ガギル！)」
「さっさとチャクラ貸せ！死ぬぞ？」
「(偉そうにするな！バカギル！)」
ガギルの体から紅いチャクラが湧き始める
「ここからだぞビー」
影分身をし二人になったガギルが完全に尾獣化したビーに高速で近づく
「尾獣玉!!」
「そんな、なんの引っかけも無い攻撃効くわけ無いだろう。なぁ？九羅痲」
「黙って攻撃を仕掛けろ！アホガギル！」
分身の片方の主導権を握っている九羅痲が吠え、罵る
「火遁　豪華暁炎花！」

凝縮された火の玉が6つ飛んでいき当たったところに炎の花が咲く
尾獣には有効な一打にはならないが、陽動としては無視できないこの術は完璧な一打にはなっている
「雷遁　閃光遊」
こっちに振り返ったと同時に目くらましをかます
突然視界がくらんだビーはよろめく
「やれ！糞狐!!」
「黙れ！糞ガギル！尾獣超螺旋弾！」
螺回転した尾獣玉がビーにに飛んでゆく
チャクラを溜めきられて放たれたそれはビーに大ダメージとなる
「やるならとどめまで！」
九羅痲に気をとれている隙に螺旋丸を完成させ、ガギルの持っている技の中でもトップを誇る難易度の避雷神の術を使い、距離を詰め、螺旋丸を尾獣化したビーの右頬にいれる。すぐに左手に溜めた螺旋丸を顎に入れる。
次は右手に溜めた螺旋丸を顔の正面と、チャクラを高速で練り上げられ、今たたき込める最大の5発ビーにぶち込み、とどめの一発の大玉螺旋丸もたたき込む
「螺旋乱闘丸！」
吹っ飛んだビーの尾獣モードが解ける
そこにはビーが倒れている姿もあった
「勝った…のか？」
いつもうるさい男が仰向けで倒れて動かない
また演技か？と思わせられるが、それを言ったらきりが無い
「おい、下手ラップ。起きてる？」
近づいていき、顔をのぞき込む
「相変わらずおまえは甘いな」
ビーの雷遁を纏わせた鉛筆が左頬をかすめた
一矢報いたと思われたその攻撃(鉛筆)は外してしまった
「じゃあな。ビー」

右手に作り出した螺旋丸をビーの腹にいれた

「くっそ、やっぱここに来るのは間違ってたかなー」
気絶しているビーの隣に座りながらぼやく
いくら何でも厳しかったかなーと体中の痛みを抑える
「おい、九羅痲、なんつーか、そのあれだ、傷口やらいろいろサンキューな。一応礼は言っとく」
「(わしが友(ダチ)を助けるのは当たり前のことだ)」
九羅痲も変わったなぁ…出会った時と比べて…

「ガギル。久しぶりだな」
「ん?」
物思いにふけり、完全に回想に入るかと思っていたが、それを邪魔するように第三者が介入してくる
「おぉ、久しぶりですね、イタチさん」
うちはイタチが一人、そこにはいた

雲隠れの一戦

「イタチさん。お久しぶりですね、こんなところにいるなんて」
寡黙な上、無表情
何を考えてるかさっぱりわからないその人はいつもなんの前触れもなく現れる。
こんな鳥にすら負けてしまいそうな男なのにうちは最強の男（S級犯罪者）なのだから世の中不思議な物だ
「久しぶりだな、流石にお前といえどもう自由になることはないと思っていたよ」
「何すか？皮肉ですか？面白い冗談ですね」
微笑みを浮かべるガギルは不気味に笑い始める
いつのまにか2人の間にピリピリとした空気が流れる
「体なまってて、ちょっとどうです？遊んでくれません？」
そのピリッとした空気に触れ興奮したガギルは我慢できなくなる。戦いたい、このうちはイタチ（うちは最強の男）と戦いたい。そしてこの猛る興奮を最高の形で沈めたい。一度でも目を見よう物ならゲームオーバーの戦いをしたい
「なーに、ちょっとした運動ですよ」
「別にいいと言いたいが、今は時間がない、要点だけ伝えさせてもらおうか」
「そうですか…つまらないですね」
ため息を吐き、持ってたクナイを地面に意味ありげに突き刺す
「で？要件ってなんですか？」
「あぁ、お前に忠告しに来た」
「忠告？やっぱりやる気満々じゃないですか」
「違う、暁という俺の所属する組織がお前狙う。その忠告だ」
「俺を？」
「正確にはお前の中の尾獣だ。本格的に一尾から九尾を集める。気をつけろと言うことだ」
尾獣。その正体は未だよく分かっていない最強の力を持つ獣。

それを集めるなんてなんとなく目的は分かる。
彼らは兵器ではない、ちゃんとした生き物である。
それを利用しようとするなんて
「なんだどいつもこいつも一緒か」
「どうした？なにか言ったか？」
「いえ、何でもありません。忠告感謝します。ですが」
「？」
「俺たち人柱力がそう簡単にやれると思ってるなら考え直した方がいいですよ？」
優しい口調ではあったが浮かべる不気味な笑顔にイタチは思わず背筋をぞっとさせる
「でもなんで暁のあなたが俺に忠告を？」
「只の気まぐれだ」
顎をなで「そうですか」と返しておく
やっぱりこの人は何を考えているか分からない
視線をイタチから外し次はどこに行こうかと辺りを見渡す
「おれはもう行く。忠告はしたぞ？気をつけろ」
そう聞こえ、振り返るとそこにイタチの姿はない
何を考えてるか分からず自分勝手、これでモテていたというんだから訳が分からない
「さぁて、どこに行こう」
眠ったままの男を軽くひっぱたき無理矢理起こす
「やられる演技はうまくても寝たふりが下手だな」
にやっと笑ったビーが体を起こし首をポキポキ鳴らす
まるで効いていないと言わんばかりのアピールに少しイラッとする
「暁か…気をつけろよビー。イタチが所属しているくらいだからなきっと癖者ばっかだ」
尾獣を集めるということは実力が無いとできないこと
どれもイタチ級の忍びならと考えると心底震え始める
俺の血をたぎらせてくれることを期待し地図を広げる

その直後に黒い豹が落雷のようにガギルの元に落ちた

「ビーサンの尾獣化。何かあったのは分かりましたが、おまえがいるとはな」

「おぉダルイ。久しぶりだな」

雷によって舞い上がった土煙の中から体をはたき汚れを落としながら現れる

当然無傷だ

「おまえとやるのは嫌いじゃないからね。さぁやろうか」

目にかかっていた前髪を上げこぶしを構える

いつもの戦闘スタイルだ

「おまえをこの手でやれる時を楽しみにしていた。あのときのこと忘れたとは言わせねぇぞ」

めんどくさがり屋とは思えぬやる気とパワーに思わずこぶしを握り直す

「さぁて、始めようぜ?ダルイ」

対峙する二人のチャクラが跳ね上がる

これから戦闘が始まる前兆

二人の間に誰も邪魔してはいけない、いや邪魔できないその雰囲気に第三者であるビーも思わず息をのむ

「嵐遁・励挫鎖荷素(レイザーサーカス)!!」

何の前触れも無くダルイの先制攻撃がガギルを取り囲むように発射する。

レーザービームの一本一本にガギルを貫こうという意思を感じる。

さすがダルイのみが使える忍術をである。

「いいねぇ、相変わらずの威力と速度だ」

すべてのレーザーを紙一重で躱しながら術の解析をする

「弱点が一見無い。相変わらず変わらない。だが…」

右足に皆が分かるほどのチャクラが集まる。

その甚大な量にダルイも何かを警戒する

レーザーがガギルの元で交差する
だが、それは空を切りガギルの姿が消える
「術者の隙の大きさが弱点なんだよな」
ダルイの懐から聞き覚えのある声が聞こえる
そして震える。やばいと
「螺旋丸」
直撃したダルイが回転しながら後方へ吹き飛ぶ
遠くで壁に当たったのか何かが崩れる音がする
「さぁ次はどう来る?」
「貴様には死だ」
真後ろから声がし、ほぼ同時に左脇腹を伝わり全身に衝撃が走る。
当然体は吹っ飛ばされている。
あの声はダルイの物ではない。
だが、厄介な奴の声である。
なぁ
「雷影」
オールバックヘアー、黒い肌、筋骨隆々、懐かしい顔がそこいた。
「ダルイ、大丈夫か?」
「はい、すいません。雷影様。どうしてここに?」
「あいつがいると連絡が入ってな、確実にあいつを捕まえる、いやこの世から葬るためにわしも来た」
変わり身をしてうまく躱したようで無傷のダルイと憤る雷影。
多少腕に覚えがある程度じゃ突破できない壁(二人組)、命を失う危険性すらある。
いいねぇ、悪くない。
「絶対に潰す!行くぞ!ダルイ!」
「はい!」
間違いなく雲隠れ最強と歌われる二人。
楽しい、楽しいな
自分の中で昂揚しているのが分かる
痛めた脇腹を抑えて立ち上がる

「九羅痲！手出すなよ！俺だけの力でやる」
医療忍術を使い脇腹を癒やし折れた骨を治す
雷影が発生源のぴりついた空気を吸う
美味い

ほんの一瞬、瞬きを一回行う間もなく雷影に距離を詰められる
姿を捉えられたときにはすでに攻撃をしようと腕を引いている
「重流暴（エルボウ）！」
左手で上手く弾き顔を蹴り飛ばす。
正面からクリーンヒットさせたのがしっかり入り、ひるませることに成功。
これでKOだと、こちらも技を構える
「俺を無視すんなよ」
背中を刀で引き裂かれる
「うっ、忘れてた」
思わず息が漏れる
「風遁　斬風十の術」
十本の指から放たれた風の刃がダルイの体を切り裂く
が煙のように消えて無くなる
「「雷遁　黒斑差（ブラック・バンサー）!!」」
空中にいた二人のダルイが同時に同じ技を放つ
さすがにあれは怪我するな…
やばいなとバックステップを入れようとする
一歩下がった瞬間、ビリッとした感触が体を襲う
これは！急いで視線を下に落とす
雷影のラリアットがすぐそこまで迫っていた
「雷犂熱刀（ラリアット）!!」
どちらか一方は必ず食らわなければならないコンビーネーションに舌を巻く
「素晴らしい」そう思わず口に出してしまうほどに
「なら…」

パチン！ガギルの両手を合わせる音が鳴った直後ダルイと雷影の技が直撃し、辺り一面を更地にするほどの放電が巻き起こった

「無傷…？」
驚愕していた
確実に直撃した、命を取ったとすら思ったはずの男が無傷で立っていたのだから
「わしは貴様を殺す、できなくてもその左腕を必ず奪う」
先ほどの攻撃ではだけたガギルの上半身を見て、怒りをさらに募らせる
特にガギルの左肩にある物を見てこぶしを強く握り混む
「それはわしが認めた奴しか許さん代物だ！今それはここにいるダルイだけだ！だからここで奪い取ってやる」
雷影の体に雷遁チャクラが纏われる
髪も毛先が逆立っている
いつ見てもすごいもんだ
さぁて、俺も久しぶりに本気だすか
体の姿勢をリラックスさせた状態に戻す
「こうなったからにはさすがにあんた達でも負けねぇぞ」
ガギルの目が赤く染まり黒い不思議な模様が浮かび上がる。
その目を見て雷影とダルイは背筋をゾクゾクとさせる
「さぁ、チェックメイトだ」
名の無い大戦がいま始まる

戦・完

「万華鏡写輪丸…」
視線を外した雷影が戦い方を確認するようにつぶやいた
あの目は厄介。
それは経験で細胞に刻み込まれた事実だった
ガギルと戦う上でこの目とやるのは避けて通れないことだと分かっていた、分かっていたことだったがやはり戦いにくい。
「ダルイ、気合を入れろ!ここからが本番だぞ」
自身を雷遁で包んだ雷影の本気
最速最強のこの技をもってしてもガギルに勝てるか分からない、それなのにダルイがびびっている時間なんて無い、故に気合いを入れ直させる。
これから最強の男を相手にするのだと
「風遁　破傷風・幾千」
向かい2人、動き出したのはガギルだった
毒(死)を纏(の)う鎌鼬(風)が2人を切り裂こうと無数の風の刃となり襲いかかる
「嵐遁　励挫鎖荷素(レイザーサーカス)!」
雷影の隣でレーザーを放ち全てを撃ち落とそうと試みる
その精度と反応速度は右腕と呼ばれるのにふさわしい動きと実力である。
毒風の刃とレーザーが対峙している雷影とガギルのちょうど真ん中で衝突し、行き場を失った2つのエネルギーが姿を変(煙を発生させ)えお互いを包み込もうとゆっくり広がる
だが雷影は動かない
利かん坊と呼ばれる雷影の動きとは思えないほど動かない
だがガギルは分かっていた
その待ちがなにを表すか
「させねぇよ」
企みを読んだガギルが次の手に出る
「水遁　爆水球」

「させない！・雷遁　黒斑差（ブラック・パンサー）」
ダルイの手によって放たれた黒い雷豹が水の球を砕くという目的だけを持ち牙を向ける
がそれは結果、果たされない
黒豹が当たる直前で爆散したのだ
「は？」
ダルイが思わず漏らした言葉だった
なにが目的の一撃だったんだ？俺の攻撃は悪手だったのか？
頭の中をフル回転させ最速でかつ正解を導き出そうとする
「五月雨」
右手を突き出しパーからぐーに変えた拳を見つけて分かった、いや直感的に理解した、1つの球と思わせそれを迎撃させるのが目的だったと
数秒後爆散した水が針以下となり数千、数万の粒となり2人に降り注いだ。流石に自分の励挫鎖荷素（レイザーサーカス）でも撃ち落とすことは出来ないその技、きっと水陣壁程度じゃ防げないだが、この人だけはと後ろを振り返る。
一瞬だった。
目になんてとても追えない速度。
本当に雷影なのかわからない
だが深く抉れた足跡と雷の一閃を見て判断した
あの人が飛び出していったと
目の前まで迫っていた貫く雨が雷によって消滅する
その威力に足がピリ付き動かない
あの人は一撃でとどめをさすつもりなんだ
それほどのチャクラが放出された気がした
次の放電が起きた時目にとらえたのはガギルの右腕と胴が別方向に吹っ飛び奥で4本指を突き出し動かない雷影だった
地獄突き4本貫手・雷槍
自分の知る限り雷影様最強、ガギルを殺すために作られたといっても過言ではない技。

自分のチャクラを最低限身に纏い、他のチャクラは全部指と足に集中させる。敵が1人の時のみに出来る一撃必殺のその技は絶対に避けることができない突きだった
あまりのチャクラの量を集中させるため一度出発してしまうと絶対に止まらない、放電をしてしまい威力が下がる、終わると絶体絶命のピンチに陥ることなど弱点はあるが一対一において、まして初見では１００パーセント相手を殺せる技だった。
「写輪眼に救われたな、ガギル」
右腕を失い血を出血させ地に伏すガギルに仁王立ちの状態で悔しそうに言った
「まさか、俺のあの技が死に繋がると思わなかったよ」
突きは写輪眼で見切ろうと試みたがもう何かを犠牲せずに命を落とさない方法はないことを知ったため1番軽い右腕損傷を選択したガギルの判断は正しかった
だが誤算は突きに付加された放電だった
突きが当たった直後、放電が直撃し体を動かさないのだ
指一本たりとも
「ダルイ!・とどめをささ!」
体を動かさないが声は発せれる雷影は動けないガギルにとどめをさすよう指示する
ガギルに狙いを定め雷遁を上空に飛ばす
ダルイはガギルのとどめを何で刺すか心の中で決まっていた
「この技で最大の敬意と殺意を乗せて、とどめを刺してやる」
空が黒く染まり雲行きが怪しくなる
雨は降らないがゴロゴロ、ゴロゴロと雷の存在は確認できる
「雷遁…落雷・迎追」
術の元を上空に再度放つ
ダルイの右手に呼応するように雷が咆哮する
チャクラを大量に消費するこの技はまさしくダルイの奥義だった
「木っ端微塵に散れ」
もはや落雷と呼べる代物のその技が一直線にガギルに降り注いだ

抉れたクレーターその中心にはガギルの屍があった
「終わりました、雷影様」
目を瞑り仁王立ちする雷影に跪く
「よくやったぞ、ダルイ」
とどめを刺したくても刺す力が残っていない自分が許せなかった
あいつだけは俺がとどめを刺そうと決めていたのに
ダルイに頼ってしまった
「わしはまだまだ足りんようだ」
目を瞑り後ろに倒れこむ
特に意味はない、強いて言うなら悲願を達成できたことに対する安堵を示していた
長かった1つの目的は果たせた
ふぅっとため息をつき空を見上げる
「ダルイ、これで終わったと思うか？」
その言葉に特に意味はなかった
写輪眼の持つ特殊な技1つ使わなかったガギルに若干の疑問があったため聞いただけだった
「はい。確実にとどめはさしました」
黒焦げでピクリともしない屍（ガギル）を見たダルイは殺したと確信していた
これで生きていたら奇跡のほか言い表しようがなかった
「そうか…」
愚問だったな
ニヤリと笑い右手を空に掲げ雄叫びをあげる
まさに勝利の叫びだった

ズキン

突如謎の痛みが右足に差し込んだ
痛い、これは？術の反動なんかじゃない第三者の行為、誰だ？儂の周りには誰もいないぞ？
同じタイミングでダルイの左手にも痛みが走った
なんだ？ガギルの置き土産か？
あいつがタダで死ぬとは思ってなかったがどういうトリックだ？

それは突然に起こった
ガギルの死体を中心として２人を引力のようなものが引っ張り始めたのだ
「なんだこれは！」
「雷影様！」
「慌てるな！チャクラは残っているか？」
「いえ、先程の術でもう何も残っていません！」
糞が！そう思いながら必死に地面に掴まる
あれに引きずり込まれたら死ぬ
そんな気がしていた
引力は時間とともに力を増す
ぐいぐいと体をもってかれる
５分を耐えた辺りでついに雷影の掴んでいた地面が砕け引きずり込まれる
やばい！死ぬ！だが、ここで何もせぬわけにはいかぬ
「ダルイ！次期雷影は貴様だ！雲隠れを任せたぞ！」
わずかに残ったチャクラを右手に貯める
自分の命をもってしてダルイを守るために
「うぉぉぉぉぉぉぉ!!」
拙く弱いが確かな一撃がガギルの体を貫いた
そしてほぼ同時に雷影の体を黒炎の刃が貫きすぐに全身を包んだ
「雷影様ぁぁぁぁぁぁ!!!」
ダルイの悲しい叫び声だけが響いた

ババアは何処へ？

「俺との戦い方、まだ分かってねぇのか」
そこに立つのは扇子ガギルだった。
それはガギルの勝利を意味している。
でも一体なぜ？
ガギルは雷影と共に黒炎に包まれ死んだはずなのに
その答えは簡単だった
ガギルの万華鏡写輪眼による幻術
あまりにも自然に素早く仕掛けられたこと
あれだけの死闘を演じまさか幻術をすぐに仕掛けてくるとは思わなかったということもあり、雷影とダルイは一瞥で幻術にかかってしまったのだ
ましてや、ガギルの幻術のレベルの高さはこの忍界でもトップクラス。気づけるものはそういない
幻術にかかるのという方が難しいレベルですらあった。
「まだまだだな」
ダルイのポーチからクナイを取り出し、雷影とダルイの顔の真横に突き刺した。
次は殺すという意味を込めて
「あれ？なんで俺殺さねーんだ？よし、殺そう」
自分の甘さに気づき、離れた2人の元へ殺意を抱いて戻る
クナイを拾い刃を立てる
「じゃ、負けたお前らが悪いんで」
2人にクナイを振り下ろす
カキンッ！という金属音が鳴り響いた
「あれ？」
クナイの刃が折れていることに気づく
「ちょっとまてよー♪俺の顔に免じて許してくれ、それがお前に頼む情けーイエァ」
「目が覚めたかビーさん、俺がそんな甘くないの知ってるでしょ？」

両の手に雷を宿す
バチチチバチチチという音を立てている
「負けた奴は死ぬ、それが俺とあんたの生きてきた世界だろ？」
両手を振り下ろす
この攻撃は誰も止められない、それはそこにいるもの全員が知っていることだ
「じゃああれでどうだ？前の話、あれを聞き入れるっていうのは」
ガギルはピタッと動きが止まる
「本当か？あの話を聞くってことはいずれこいつらの敵になるってことだぞ？」
「今ブラザー達を殺されるよりはマシだぜ」
「ふっいいだろう、聞き入れてやる。だが、次はない、次やりあったら殺す、いいな？」
「分かってるよ」
ラップ口調がないのがどれだけ今真剣な状態か分かる
お互いにガチである
「じゃあ、俺は行く。じゃあな」
出した拳を引っ込ませ、その場を後にする
目指すは三代仙人の1つ〝湿骨林〟である。
「仙人化だったよな、あの時変態オヤジが使っていた技は」
1人森を走るガギルの脳裏には過去の自来也との戦いが再生されている。カエルを2匹肩に乗せ、特殊な技を使うおやじに苦労をさせられた記憶がある。あの後文献で調べ、仙人化するには3つの方法があり、湿骨林、龍地洞、妙木山のいずれかに行く必要があるらしい
俺が目指すのは医療関係に特化した湿骨林である。
「ただ場所が分からないんだよな」
そういくら調べても分からなかったのだ
どこの文献にも書いてなかったのだ
「取り敢えず、あそこの仙人、変化ババアの元へ行ってみるか」
唯一の手がかり綱手の元へ足を進める
「さぁて、取り敢えず、町に行ってみるか」

情報のために書き込みやな
近くの町に向かう
「どうせ博打だろ」
綱手の手掛かりとなる情報は1つしかなかった。

ババアと化け狐とぺったんこと阿呆

あらゆる街で綱手についての情報を集める
が、結局わかったことは、ギャンブル好きという既に知っている情報だけだった。
この広い木の葉でたった1人を見つけるなんて雲をつかむような話だったなと、なにも掴めない今の状況に頭を悩ませる
今、自分がいるのは、1番目撃情報が最近の短冊街という場所だった。
賭場はもう回りきった…
「どこ行ったんだよ」
もう終わった…と諦めムードに包まれる
「シズネー、次はハイボールだ！」
どっかで聞いたことある声が聞こえてきた
どっかで聞いたことのあるババアの声が
「綱手様～いくら珍しく勝ったからって飲み過ぎですよ！」
「うるさい！さっさと頼めー！」
「もー…すいませーん！ハイボール1つ！」
「あいよ！」
「何か悪いことが起こらなければ良いんだけど」
ギャンブルで勝てないことで有名な綱手姫
今日はそんな彼女が珍しく勝った
勝ってしまったから日
これから何かが起きないか心配で仕方がない付き人のシズネはため息が溢れる

いた
神出鬼没のギャンブル姫は俺のすぐ後ろにいた
思っていたより早く見つかった
店員からハイボールを受け取り、サプライズを仕掛ける
「へい、お待ち」

ニヤリと笑いながらハイボールを置く
ガギルの顔を見て2人はゾッとした顔をしている
「お久しぶりです。綱手様、いや、ねーちゃん」
「おぅらぁぁぁ!!!」
挨拶した瞬間、怪力で思いっきり殴られる
当然、躱すが、相変わらず全く話を聞かない人だ
「何するんですかー」
地に着地し、相変わらずニヤついていると後ろから殺意を感じ、瞬身の術を使い回避する
「シズネ、良い動きするようになったね」
攻撃してきた人の成長を感じ、思わず称賛の声を上げる
「何しに来たんですか?捕まってたあなたが!」
「シズネ!会話なんかするな!惑わされるぞ!」
「酷いなー。会話しに来たのに」
わざとらしく困ったなーという演技をして、会話を誘うが意味がない。臨戦態勢を解いてくれない
「あんたが何しに来たって関係ない!その罪を償え!それがお前に許される唯一のことだ!」
威嚇しながらもそんなことを主張してくる
「ごめんね、ねーちゃん。俺はまだやることがあるんだ」
臭い演技をやめる
「そのためなら、いくらねーちゃんとシズネでも手を抜かないよ」
会話をするために会いに来たというのを主張するために、抑えていたチャクラを少しずつ放出し始める
「やってみな!シズネ!あんたは離れな!」
「いいえ!私もやらせてください!」
「あんた…でも!」
「大丈夫です!絶対に手なんて抜きません!」
「分かったわ!足引っ張るんじゃないよ!」
「はい!」
2人で結託して俺を殺そうとしている

前は躊躇してたのにもうその迷いはないように見える

シズネの千本がこの戦いの火蓋を切る
殺傷力は急所に当たらないとないに等しい。
分かっているが本能でつい、かわしてしまう
ジャンプして躱すとそこに飛ぶのが分かっていたように予測して飛んできた綱手が拳を振り下ろす
両手を突き出し上手くいなして、空中で地面に投げ落とす
「〝火遁　豪炎上の術〟」
火炎放射のように吐き出された火が2人を包み込む
まともに食らってたら燃え尽きているであろうと火炎放射を止めると不自然に盛り上がった山が出来ている
どうやら上手く防いだようだ
じゃあ蒸し焼きにして、飛び出してきたところを仕留めるかと次の印を結び始める
「〝蒸遁　豪炎水の術〟」
火遁と水遁を合わせた血継限界の技
この蒸気に触れようものなら火傷どころじゃ済まないものである
その蒸気は蒸すだけでなく、その勢いで山を壊すが中はもぬけの殻である。
「あれ？」
背中にとんでもない威力の衝撃が走った
その一撃は背中の骨にヒビを入れてくれ、持っていた体力を根こそぎ奪われた感覚に陥る
その勢いは受け身など取らせてくれる間も無く地に激突させる
このままじゃ追撃されてしまうので綱手のいる空に雷遁を放ち牽制する。簡単に躱されるが離れさせることに成功する
「〝忍法　毒霧の術〟！」
術の気配が側面から感じ、見ると毒霧が迫っている
シズネの仕業だろう

思わぬピンチにとりあえずやばいと印を結ぶ
「風遁は苦手なんだけどな…〝風遁　追風の術〟」
自分の口から吹く技ではなく
自分の周りの空気の流れを追い風に変える技であり、毒霧の侵入を防ぐ
「九喇嘛！力貸せ！」
『こんなところでピンチになりおって、雷影が浮かばれんぞ』
「うるさい！骨折れとるねん！頼むよ！死ぬぞ？」
『ふん！』
金色のチャクラが身体を包み込む
それにより負傷した傷も完治する
影分身をして自分と含めて２人になる
ガギルと影分身対シズネ、綱手の戦い
いくら片方が影分身といえど、ガギル。
しかも九尾のチャクラを身に纏っている
一気に戦況がひっくり返る
「こりゃまずいね」
「綱手様…引きましょう」
「逃がさないよ」
チャクラを手のような形にして、２人を掴まんと伸ばす
結構な速さで手を伸ばしたが、間一髪で２人が躱すがそこを読んでいた影分身が同じように手の形にしたチャクラで掴み拘束する
「くそ！」
「きゃっ!!」
「捕まえた」
２人はもがいているが、逃げられないことを悟り動きが止まる
「じゃあ話をしようか」
１人ガギルは胡座をかく
２人は相変わらず、影分身が拘束している
「もう戦う気がなく、話を聞いてくれるなら拘束解除するけど？」
綱手は黙って頷く

「シズネもいい？」
　同様に頷いたため、影分身を解き、拘束を解除する
「じゃあ、まぁ、こんなところで話すのもなんだし、戻るか」
　場所を先ほどの酒場に移動し、取り敢えず酒を注文する
「なんだ？話って」
　ハイボールを飲み体の中に酒を入れたところで、会話を始める
「仙術を会得したい」
「駄目だ」
　説得は難航しそうだ

伝説の、、、何だって？

「さぁて、、どうするかな」
当てが外れ、仙術を会得する手段を失いそれを見上げる
「あそこしかないかな、、できるだけ行きたくなかったけど」
次の場所を定め、空を見上げる。
その中のふたつの大きな雲を見て昨晩のことを思い出す。

「ねぇちゃん。平和のためだ」
「あなたがそれを言いますか!!木の葉を裏切り！綱出様を裏切り！私を裏切ったあなたが！」
机を叩き怒りに身を任せシズネが怒号を上げる
沈黙を貫くガギルに今度は綱手が口を開く
「ガギルおまえはやってはいけないことをした。忍として、人として、男として」
そして言葉は続く
彼に対する罵詈雑言の言葉が
「あなたは私たちの敵（てき）です。敵（かたき）です。」
、、る、、い
「今、お前がすべきなのは仙術を会得することじゃない。木の葉に対する贖罪だ」
、、る、、s、、、、い
「あなたは捕まるべきです」
、、、、るさい
「お前は」
うるさい
「あなたは」
うるさい
「必ず、木の葉が捕まえる（捕まえます）」

「うるさい」
突然大きい声を出したことに店内の人々は驚く
二人が話す前に言葉をぶつける
「お前らに分かんのか?!街を歩けば蹴られ、殴られ、罵詈雑言を浴びせられる俺の気持ちがよ!」
「なんの覚えもない訳の分からない恨みをぶつけられる俺の気持ちがよ!」
「それをやり返すな?そいつらを守れ?んな馬鹿な話があるかよ!」
両手を広げ、自分の過去(痛み)を叫ぶ
「俺だって、俺だってこんなことやりたくない。ただ、痛みでしか人間は他人の思いが分からないんだ、、」
涙を流し、心の内を語る
「分かってくれよ、、なぁ、ねぇちゃん。シズネ」
「ガギルさん……」
涙を流し、自分の気持ちを赤裸々に語ったガギルに思わずシズネは同情する。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
大きなため息が沈んだ空気を切り裂く
「綱手様?」
「相変わらずクサイ演技だな」
涙を流しうつむくガギルに冷徹に言葉をぶつける
「お前が人を思い涙流すか、シズネあんたも学びな」
「くっくっくっく、あっはっはっはっはっは!!やっぱ、ばれるか」
「え?え?」
一人ついて行けないシズネだけが戸惑っている
「もうさ、さっさと教えてくんない?ねぇちゃん」
さっきまでのしんみりムードを一気に変え、元のガギルに戻る
「教えるわけ無いだろ。私は5代目火影であり、五影の一人。敵であるお前を強くする可能性は作ってはいけない」
「ふーん。まぁいいわ、別当たるわ」
机に金を置き、席を後にする

「あ、１つだけ言っておくわ。」
振り返り左手の人差し指を立てる
「今度俺の行動邪魔したら、ねぇちゃんだろうが殺す。」
「ふん、あたしの台詞だ。次会ったら殺す」
「っは！じゃあねぇ～」
片手をひらひらとさせその場を立ち去る
「ちょ、ガギル!!」
シズネが追おうとするがその腕を綱手が掴む
「何で止めるんですか！」
「今じゃやない。あいつを追うのはタイミングをしっかりはかれシズネ」
(ガギル、あんたは私が止める。師である私が責任をもって)

――――――――――――――――――――――
場所は変わり、音の里

「あら、あなたが私のところに来るなんて、珍しいこともあるものね」
陰険な変態野郎のところである。
「当てが外れてね。ここしか可能性がなかった」
相変わらず辛気くさいところだ
じめじめして、よくこんなところに住めるもんだ

「そうね、あなたのことだから仙術求めて綱手のところに行ってみたけど断られたってところね」
「すげぇ、正解」
　何考えているか分からない野郎だ
　いや？今の見た目は女みたいだから野郎ではないか
「簡単よ私があなたにチャクラを流す呪印を刻めばあなたにも仙術を得られるようになるわ」
「なめんなよ？代わりに操り人形だろうが」
　舌なめずりする大蛇丸にチャクラで脅し、殺意をぶつける
「どこで得られるか教えてくれよ。あとは勝手に俺がやる」
「教えて上げるのはかまわないけど、ただっていうのはねぇ」
　うーんっていう悩んでる演技をしているが嘘を見抜く自信はある
　だれが師匠だと思う？忍界一の化け狐やぞ？
　あ、それは俺か
「あなたのかｒ「却下」あら、残念。」
「他にないのか？」
「じゃあ、教えて欲しければ私の口を割らせてみなさいとかありきたりな台詞を言ってみようかしら」
「ふーん、そんなんでいいのか？」
「伝説の三忍が一人、大蛇丸。かかってきなさいクソガキ」
　明らかにチャクラの質が変わる
　殺意と敵意に溢れている
「胸を借りますね先輩？」
　呼応するようにチャクラを解放する
　さぁてやりますか